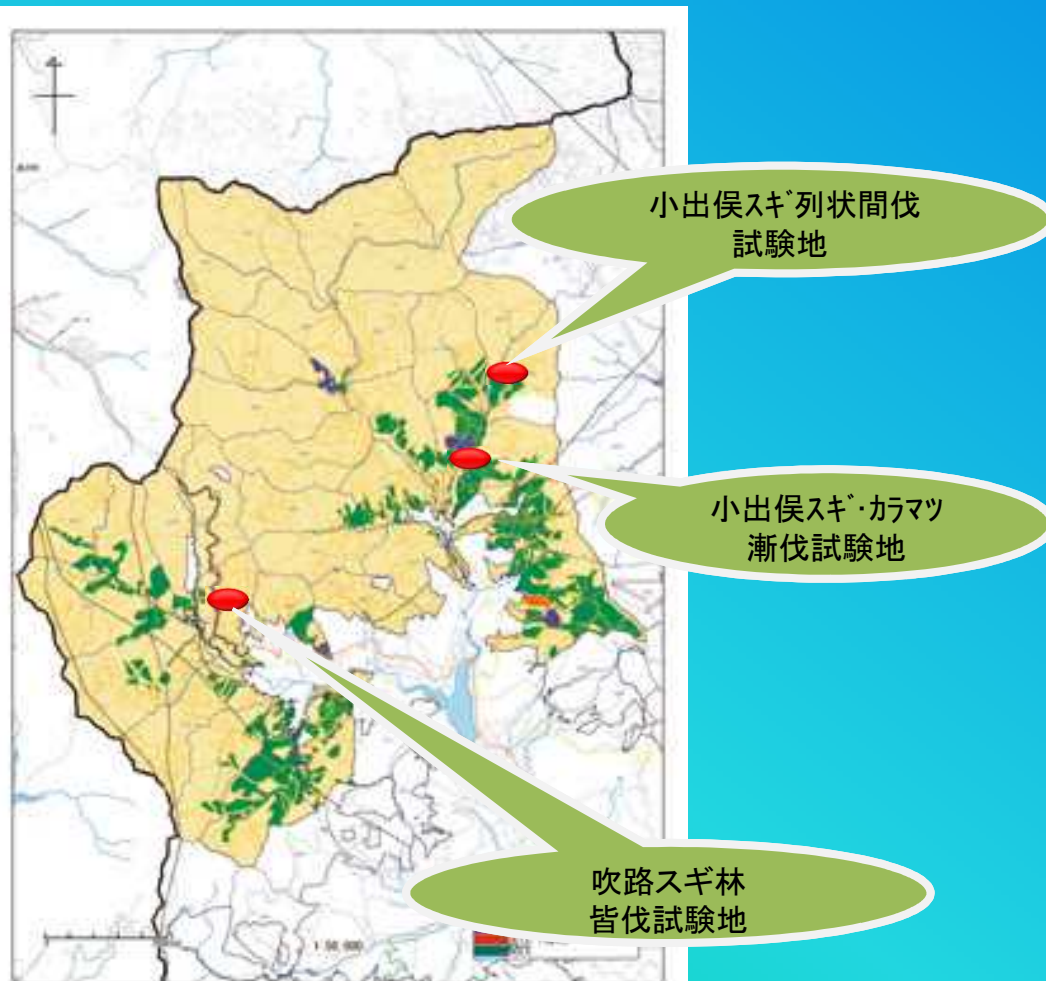


「生物多様性保全と地域づくりの取組事例」

1. 人工林の自然林への誘導

赤谷プロジェクトエリアの約3,000haの人工林のうち、約2,000haを自然林に復元することを目指して掲げています。自然林に誘導するための森林の整備は、利根沼田森林管理署の事業として、主に間伐を実行してきました。



左の図は赤谷プロジェクトが始まった平成16年から平成27年までに進められてきた自然林への誘導を取り組んできた箇所(緑)の位置図です。間伐を主体に12年で約700haの人工林で整備が進められてきました。

また、樹種、伐採方法が異なる箇所に試験地を設置し、伐採後の植生の回復過程をモニタリングすることにより、人工林から自然林への転換の推移を把握します。

植生WGにおいてモニタリング結果の評価・分析を行い、必要であればモニタリング内容を見直すなど順応的管理を行っていきます。

小出俣スギ 伐採試験地



2011.10



2016.05

スギ林から自然林への復元試験地の調査結果(途中経過)

- 2011(平成23)年に等高線に対し、水平・垂直に伐採幅列(幅20m、40m)、自然林からの距離、現在の人工林になる前の前世林の状況、光環境に着目し、条件の異なった伐区を複数設定。
- モニタリング調査は伐採後1,3,5,10年目に実施。これまでの調査から、伐採幅だけでなく、伐採前の母樹や稚樹の状況、自然林との距離、森林の履歴(1代目、2代目人工林)等が更新状況に影響を与えることが考察されえている。
- 植生だけではなく、ほ乳類(コウモリ類含む)、昆虫、鳥類を指標種として、伐採後に生態系がどのように復元するかをモニタリング。

小出俣 カラマツ伐採試験地



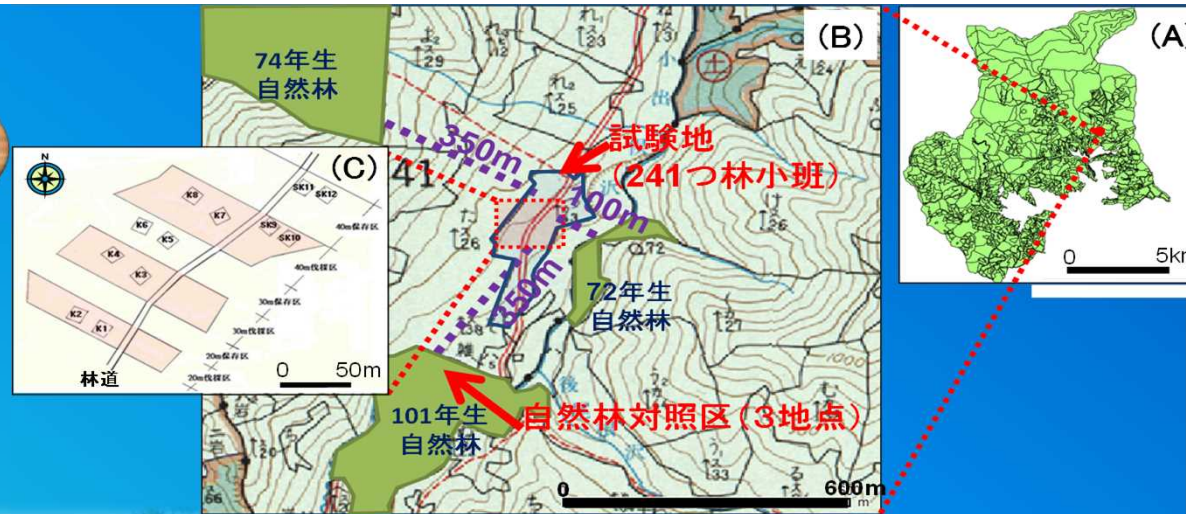
2006.11



2012. 9



2016.06



カラマツ林から自然林への復元試験地の調査結果(途中経過)

- 2006年に幅20m、30m、40mの伐採区を設定。
- 稚樹の発生本数は、20m幅の伐採区が最多。
- 伐採9年後には一部でさらに個体数が増加。20m、30m、40m、ササ林床区の順番で個体数が多かった。
- 伐採9年目に定着した高木性樹種の稚樹は400～7,600本/ha、ササ林床地では400本/haとなった。
- 天然更新木はウワミズザクラやエゴノキが多く、目標とする樹種(ブナ、ミズナラ、クリ、コナラ)はほとんどなかった。